都立広尾高校の「奉仕」の授業について

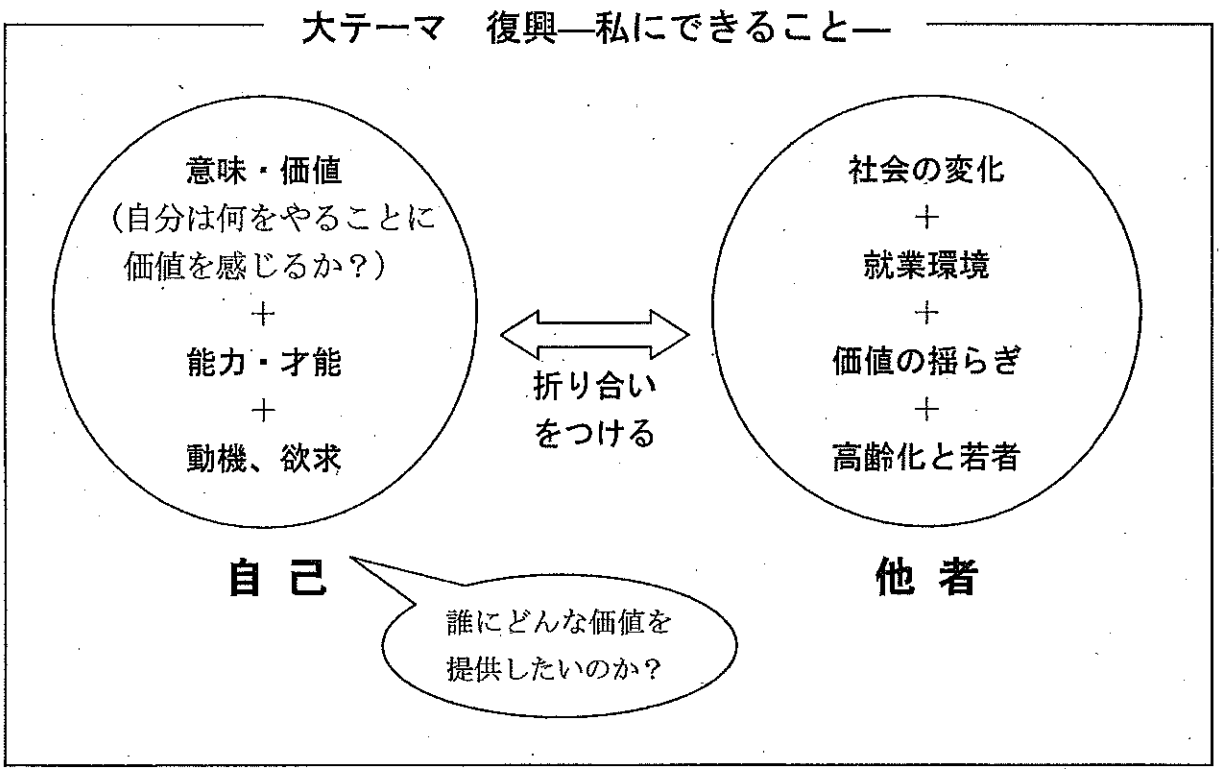
東京都立広尾高等学校
浦部　陽介

1．はじめに

広尾高校で奉仕の授業に関わって2年目になり、授業計画を担当してきた。セクショナリズムの染み渡った学校組織で「奉仕」を計画することの難しさと自分の計画力のなさを実感している。

広尾高校では、奉仕は総合的な学習の時間の1単位として位置づけられ、1学年での必修単位となっている。24年度は「復興―私にできること―」という大テーマのもとに授業を構成している。

授業の目的は「社会のためにできること、社会とのかかわりを考える」、「自分は何を大切だと考えているかを考える」としている。



生徒が将来にわたり自分の価値観や能力を生かしていくために、自己と他者（社会）を2極として捉え、自己と他者（社会）の折り合いをつけていくための下地をつくることを目的としたものである。東日本大震災とその復興支援を題材として、自分という存在を社会でどう生かしていくかを考えさせようとするものである。

また、「奉仕」の計画・実施について外部コーディネーターの協力を得ている。「奉仕」に前向きな教員が少なく、教員の計画能力の不足もあり外部コーディネーターの協力なくしては授業がなりたたないという現状にある。

2．都立広尾高校について

「奉仕」対象学年：1学年（1クラス約40名、5学級、計199名）

学校は渋谷駅から徒歩15分、恵比寿駅から10分の住宅街に位置している。広尾小学校、広尾中学校、國學院大學に隣接しており、広尾中学校と國學院大學とは連携事業を行っている。大繁華街に近い環境でありながら、地域の活動は活発であり、自治会を中心に様々な地域行事が行われている。

生徒は世田谷区、目黒区、大田区、品川区、渋谷区、江東区などを中心に都内全域から通っている。三鷹市や小金井市など西東京地域から通う生徒も多く、高校周辺地域から通う生徒は比較的少ない。自由服で頭髪指導もない都会の制服がかわいい学校というイメージで集まった生徒が多いと思われる。3年前から制服を導入し、頭髪指導もおこなうようになっているが、そのような校風が残っている。

偏差値50程の中堅校であり、学習に対する意欲はお世辞にも高いとは言えない。人なつっこく、教員に対しても気軽に話しかける生徒が多い一方で、本音と建て前を上手に使い分けている側面も強く、教員からなにかを強制されることを極度に拒否する傾向があることを感じている。したがって、興味のあることでは力を発揮するが、興味のないことからは全力で逃避する傾向がある。

3．授業「奉仕」の実施・内容について

24年度1学期は以下の活動を行った。6月20日の活動を1学期の活動の中心において1学期全体の授業を計画した。

回	月日	内容	外部講師
1回	4月11日	オリエンテーション、導入 昨年度の被災地交流活動の紹介	石川隆博氏 （ピアサポートネット渋谷）
2,3回	5月16日	講演 「震災と復興に向けての取り組みを考える」	中野里美氏（株式会社ソシオエンジン・アソシエイツ）
4回	5月30日	ワーク実施、発表 社会と今までの自分と将来の自分を考える	—
5回	6月6日	講演 「個人と仕事と東日本大震災」	飯塚一仁氏（KDDI株式会社CSR・環境推進室室長）
6回	6月13日	講演「被災地を取材して、インタビューのやり方・まとめ方」	原田朱美氏 （朝日新聞記者）
7,8回	6月20日	「パネルディスカッション」、「記者会見」 阿部敬一氏（おらが大槌夢広場代表理事）、飯塚一仁氏、佐々木祐季（NPO遠野まごころネット）、中野里美氏、馬場謙太郎氏（神奈川大学3年）	
9回	6月27日	「まとめ、記事作成」	—
10回	7月19日	「まとめ、記事完成」	—

第１回　ピアサポートネット渋谷の石川さんの進行で、２年生３名が昨年度の被災地交流活動の報告をした。復興がほとんど進んでいないこと、復興食堂の岩間店長との交流、大槌町の高校生との交流などについての話をした。

第2,3回中野里美さんの講演。震災後大船渡に移住して、陸前高田の復興にたずさわっている経験をお話しいただいた。

生徒の感想から

・私、将来全く決めてません。だけど、今日の人とのつながりを聞けて、社会に出ることへの挑戦心がうまれました。将来の自分がしっかり者であるようにもっと今を大切にしていきたいと思いました。

・話を聴いて、一番印象に残っているのが、町づくりと言いたくない、ということです。えらそうな感じがするし、町づくりはこんな簡単なことではない、ということがとても印象にのこりました。町の人たちと同じ目線にたって仕事をすることが大切なのだということが分かりました。

・陸前高田の被災した方の、「ボランティアはいらない、何か目的を持ってきてくれ。」という言葉に強く胸を打たれました。将来に向けて、自分も何か目標や目的を持って高校生活を送ります。

・中野さんは東京と陸前高田を結ぶ重要な仕事をしていると思いました。その仕事に行き着くまでには「これをやろう。」という目標はなかったようですが、始めてみたらやりがいや大切なことを知ることができたという話はとても参考になりました。話の中で「この言葉は覚えておこう。」というものがありました。それは「人は社会で１人では生きていけない。」です。常識のように思えますが、僕は「なるほど。」と思いました。

第４回　自分は何に価値をおいているのか？何を大切だと思っているのか？これまでの自分について振り返り、クラスで発表した。

第４回パワーポイント資料

いままでの自分の歴史

ー あぁ青春の日々よ ー

よくある質問

「将来どんな職業につきたいですか？」

「夢は何ですか？」 → 正直キツイ質問

中野里美さんの言葉

「私はいまだに
進路を選んでいない。」

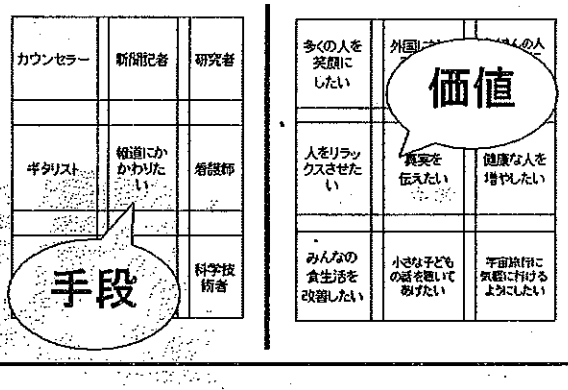
そもそも仕事ってなんだ？

カウンセラー	新聞記者	研究者
ギタリスト	報道にかかわりたい	看護師
栄養士	保育士	科学技術者

（誰かのために）したいこと、もたらしたいもの

多くの人を笑顔にしたい	外国に対する偏見をなくしたい	たくさんの人にきれいになってもらいたい
人をリラックスさせたい	真実を伝えたい	健康な人を増やしたい
みんなの食生活を改善したい	小さな子どもの話を聴いてあげたい	宇宙旅行に気軽に行けるようにしたい

誰にどんな価値を提供するのか？



中学生がつけた仕事の名前

- 日本人のために伝統をつないでいく仕事
- お客様に綺麗の魔法をかける仕事
- 人のために世の中を平和にする仕事
- お客様のために心の回復をはかる仕事
- 人生の大先輩へ恩返しをする仕事

自分はなにをやることに意味や価値を感じるだろう？

ワーク１

思いつくものをできるだけたくさん書こう。

発表

今後の予定

6月6日　KDDIのCSR室室長の飯塚氏の話

6月20日 記者会見を行います
みんなが記者になり、記事にします。
5名のゲストが来校予定。

そのために、

6月13日 現役バリバリの新聞記者の方が記事の書き方を伝授しに来て下さいます。

おわり

第５回　KDDI 株式会社の飯塚一仁さんにお話し頂いた。社会のために企業ができることは何か、CSR という立場、父親という立場から働くということについて考えた。

第６回　朝日新聞記者の原田朱美さんの講演。震災直後から被災地に入り被災地の子どもたちを取材した経験をお話いただいた。聞かなきゃいけないけど、聞けないという矛盾を抱えながらの取材、一生忘れることはないであろう子どもたちなど、原田さんが書いた記事を読みその裏にはどのような人との関係があったのか、どのような思いで記事を書いたのかなどの話をして頂いた。また、次回の記者会見に向けて、取材のやり方、記事の書き方も教えて頂いた。

第 7,8 回　復興支援関わる５名の方々を招き、パネルディスカッションを行った。大槌町出身で復興にたずさわる阿部敬一さんも来てくださり、涙ながらに被災地の状況を話してくださった。

パネルディスカッションのあと、各クラスにそれぞれの講師の方に入って頂き、生徒が記者となって聞きたいことを聞き、それぞれの講師についての記事を書くという活動を行った。

東京都立広尾高等学校
Tokyo Metropolitan
Hiroo High School

報道発表資料

2012年6月13日

Press Conference

記者会見　復興にかかわる想いを伝えたい

私たちは3月11日の東日本大震災からそれぞれの場所で復興にかかわってきました。大槌町の出身、後方支援基地になった遠野の出身、東京の出身など経歴も様々です。東日本大震災と復興に対する活動と想いを広尾高校生だけでなく、広く社会に伝えていきたいと思っております。「未来」を形にするために現場で動いている想いをぜひご取材ください！

日時　2012年6月20日（水）13時15分開始（13時開場）

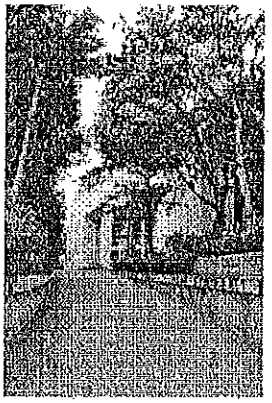
場所　東京都立広尾高等学校　第一体育館

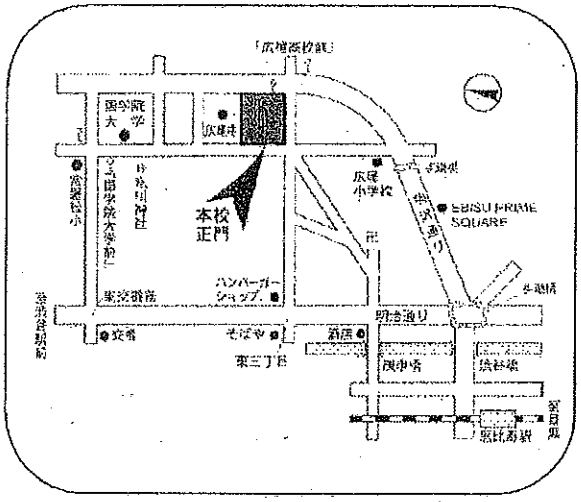
（第２部開始前に１学年の教室に移動して頂きます。）

内容　第１部　パネルディスカッション（１３：１５～１４：０５）

第２部　記者会見（１４：１５～１３：０５）

パネリスト　阿部敬一、飯塚一仁、佐々木佑季、中野里美、馬場謙太郎





※報道関係者のための企画のため、一般の方のご入場はお断りしております。

パネリストプロフィール

阿部　敬一

一般社団法人おらが大槌夢広場代表理事

岩手県大槌町出身。農家の長男に生まれ、親からは跡継ぎを希望されたが、農家の仕事が嫌いで地元の高校を卒業後料理の世界に入る。たくさんの方の出会いから、様々な世界観を学び、今は自営業の傍ら岩手で農業もおこなっている。モットーは想いは実現する。座右の銘「自分が源泉」。男の子3人と妻の5人家族。

仕事・活動内容等

権利収入で生活しながら、ボランティアで社団法人の代表を務める。 阪神大震災の経験から、震災直後から生活のすべての時間をボランティアとして使い現在に至る。 震災後、立ち上げた社団法人は復興食堂を運営しながら外からの来訪者に対して、食事と集いの場を提供している。その他に、被災地ガイドのツーリズム、被災地での企業研修受け入れ、震災前後の記録を展示する復興館、特に若者を中心にした人材育成事業を行い、町の復興をサポートしている。

飯塚　一仁

KDDI 株式会社 CSR・環境推進室長

企業で CSR(企業の社会的責任)を担当。携帯電話や、ネットで青少年がトラブルに巻き込まれない様な活動を行う仕事をサポートしている。

仕事・活動内容等

ケータイ教室、東日本大震災被災地ボランティア、環境保全活動、3R 活動(リデュース、リユース、リサイクル)推進、寄付やボランティア活動の社員への働きかけ・PR。

佐々木　佑季

NPO 法人遠野まごころネット東京事務所

岩手県遠野市出身。釜石南高校に通う。2010 年 10 月から遠野市の観光資源を調査する仕事を行う。当時の役職は"人係"。明るさが取り柄なので、人から観光資源になるものを聞き集め、調査をする担当。関東に戻ろうとしていた 3 月に東日本大震災が起こった。遠野市は被害はなかったものの、山ひとつ超えた沿岸部は大津波の被害を受け、1番近い自分たちが率先して支援をしなければと、会社で物資を集め大槌の避難所へと運んだ。そこから活動が広がり、被災地支援団体まごころネットを設立。以来まごころネットスタッフとして活動中。昨年 12 月に東京事務所ができ、現在東京事務所担当。

仕事・活動内容等

震災直後の物資配布やがれき撤去などの緊急支援から始まり、その後被災された方々から上がるニーズに対し、幅広い支援活動を行う。県外海外からの個人ボランティアも受け入れ、2012 年 5 月末現在、6 万人以上のボランティアが活動。東京事務所では、現地の情報発信や、ボランティアに行きたい人への案内。被災地への支援を考えている企業との打ち合わせと、現地ニーズのマッチングなど。

馬場　謙太郎

神奈川大学人間科学部人間科学科3年

1991 年生まれ。20 歳。神奈川県厚木市出身。神奈川大学へ進学し、準硬式野球部へ入部。と同時に体育会本部役員も務める。昨年 7 月にボランティアで岩手県に行き、初めて東北地方の土を踏む。自身は、東北出身ではなければ親戚に東北の方は一人もいない。ボランティアに行って、少なからず失敗も経験したが、「大切なことは行動すること」と話す。将来の夢は高校の教師。趣味は一人でドライブとピアノを弾くこと。

仕事・活動内容等

昨年より神奈川大学が行う「東北ボランティア駅伝」に参加。ボランティア活動だけでなく、普段教室では感じることのできない遠野の文化に触れることも目的にしている。活動内容は大きく分けて、旧遠野市役所で行っている三陸文化復興プロジェクトと、まごころネットでのハードボランティア。現地の状況に応じて、長期的な支援も目的としている。

中野　里美

株式会社ソシオ エンジン・アソシエイツ執行役員、一般社団法人ソーシャルビジネス・ネットワーク事務局、なつかしい未来創造株式会社

兵庫県川西市出身。4 年間の大学生活の後、就職し東京での生活が始まる。折込広告会社の営業や、シニア世代のマーケティングを行うベンチャー企業を経験し現在の会社に転職。東日本大震災後、会社をたちあげ、産業復興の仕事に携わる。現在は岩手県大船渡市の住民となり、東京と行ったり来たりの生活を送る。

仕事・活動内容等

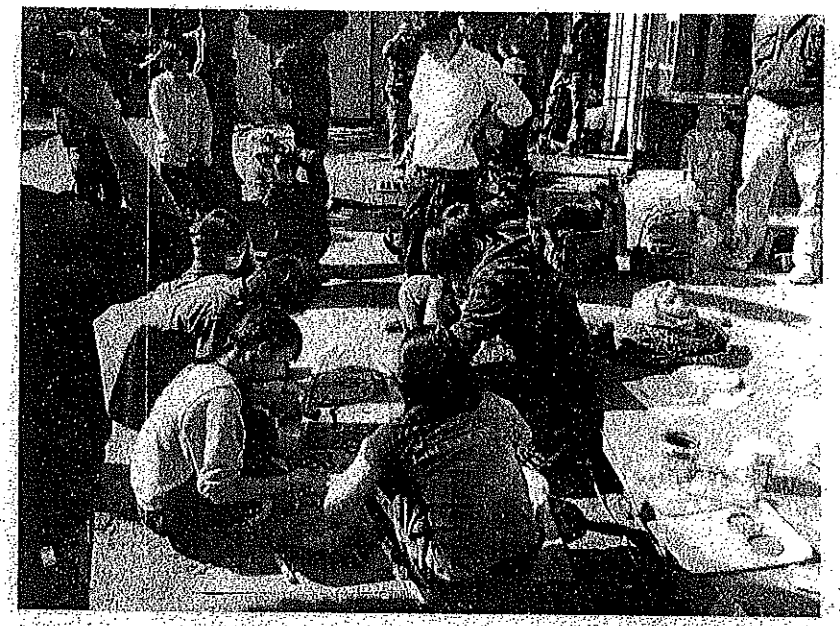
陸前高田には宿泊施設が少ないため、宿泊施設を建て事業を行う。付随して、宿で着る衣服や使う器なども作り、そこに仕事を生み出ということにチャレンジしている。また、被災地で起業したい人を支援する事業も行う。細かな日々の仕事は、打合せ、調査、スケジュールの調整、書類作成など。とにかく人とたくさん会う仕事である。

なつかしい未来創造株式会社とは

陸前高田の中小企業経営者と共にたちあげた会社。1000 年先の未来までつづくまちをつくるために、雇用を生み出すための事業を行う。

4．被災地支援活動について

昨年度からNPO法人ピアサポートネット渋谷の被災地交流活動に希望者が参加している。昨年度はのべ20名以上の生徒、3名の教員が参加した。朝日新聞の原田さんの記事「今子どもたちはNo.56－震災を生きる①－(2011年5月11日朝刊)」を授業で紹介し、そこに書かれている岩手県大槌町の高校生グループにメッセージを送ったことで被災地との交流活動が始まった。昨年度は8月、10月、3月の3回、いずれも2泊3日（内車中1泊）の行程で、今年度も8月2日から4日で実施した。現地の高校生とは顔なじみになり、昨年12月には5名が東京を訪れ、広尾高校生が案内をした。また、広尾高校にも個人的に訪問してくれている。ピアサポートネット渋谷の石川さんと相川さんが幾度となく大槌町を訪れていることで、復興にたずさわる方々や安渡小学校の仮設住宅に暮らしている方々とも関係が築けており、人と人の交流が活動の中心になっている。

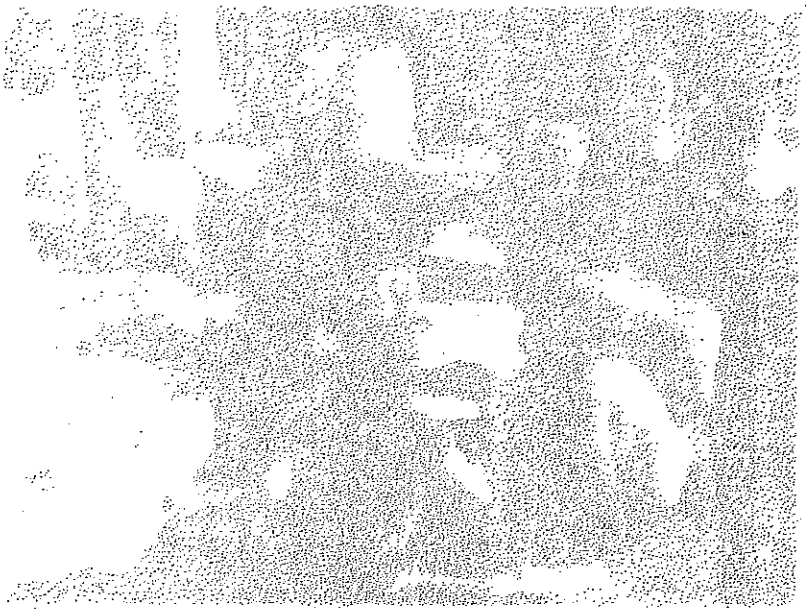
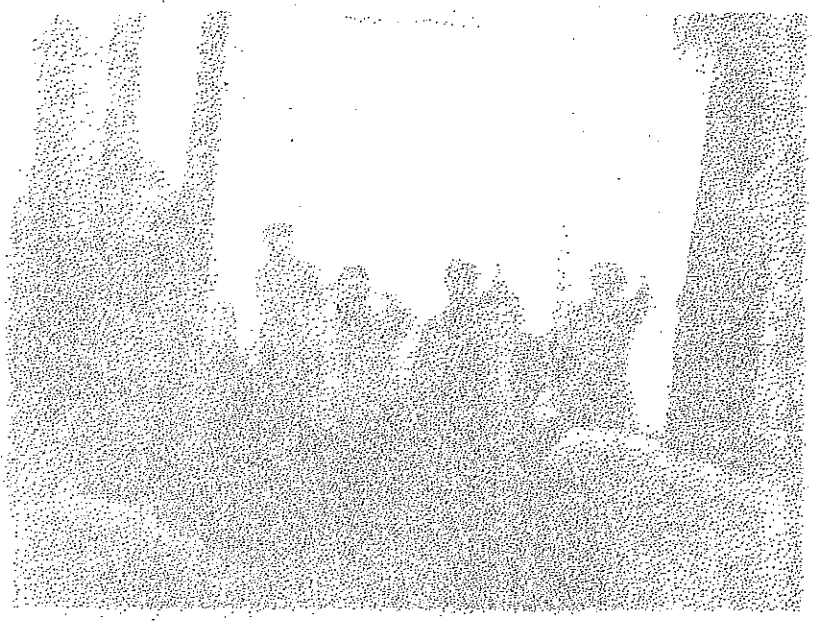


↑復興食堂の看板作りの様子

↑仮設住宅の住民と手を振って別れる

5．「奉仕」の課題について

広尾高校の「奉仕」は今年度も改善を加えているが抱えている課題は大きく多い。その最大のものが約 200 名を一斉に拘束して授業をしなければならないということである。場所も校内に限られている。この制約のために、外部から講師を招くという活動が多くなり、実際に生徒が現地を訪れるなどの体験活動をすることが難しくなっている。体育館に集められ、話を聞かされることにうんざりしている生徒も多い。今年度に入る前に、校外でのグループごとの活動を提案したが１人の教員の賛同が得られず断念した。

また、「奉仕」に対して前向きに取り組む教員はごくわずかであり、教員の時間的・精神的負担感が大きいこともあげられる。

授業を計画する立場として、校内での一斉型授業という制約を取り除きつつ、教員の協力を得ながら実施していけるよう改善していきたい。